

発達障害児の親の中年期の アイデンティティ

—被援助者から援助者・保育士をめざすプロセス—

小坂 智子

I はじめに

発達障害児を育てることは、定型発達児とは違う想定通りにいかない発達過程から育児困難に陥り、孤立してしまうなど、定型発達児のそれに比べてもストレスフルである（大久保、2017）。他の具体的な要因として、“周囲の理解や対応”、“将来への不安”、“障害認識の葛藤”などが挙げられる（山根、2013）。発達障害児を授かり、育てていくという人生の困難な体験を乗り越えていくには、親自身による我が子の障害受容が不可欠であるとの研究報告もされている（荻原・奥田、2019）。国内論文検索サイト cinii で「親、障害受容」で検索すると161件がヒットするように（2021年3月現在）、これまで多くの障害児の親の障害受容の研究がなされてきている。

「障害受容」という概念について初めて言及したのは Grayson（1951）である。第二次世界大戦後、戦傷障害者の心理的問題が社会的関心を集め、当初は中途身体障害者対する研究が主なされてきたが（岩井、2009）、近年においてその研究対象は、先天的障害者や知的障害者、精神障害者、そして障害者の親など多岐にわたり、「障害受容」は母親自身の「自己受容」であるとも結論づけている研究もある（Solnit. & Stark. 1961）。

人の一生を理論化したエリクソンのライフサイクル論によれば、青年期には、その発達課題である「アイデンティティの確立」がなされるが（Erikson, 1968）、このアイデンティティの確立には肯定的認知評価、すなわち「自己受容」との関連が認められている（山田、2004）。そして、このアイデンティ

ティの確立は青年期のみに限られたことではなく、その人生において危機に遭遇する度に軌道修正をし、アイデンティティは再構築され、人は中年期において何かしらの危機を迎え、それを乗り越えることによって新たなアイデンティティを確立するという（岡本、2002）。

障害児を授かることは中年期の入り口におけるとてつもない危機であり、喪失体験であるとも言える。親は我が子の発達の遅れや障害があると知った時、その前には「壁」がたちはだかり、強烈な衝撃を与え、未来を思い描くことが出来なくなってしまう（Stern, 1998）。このような人生経験は、親のアイデンティティ再構築にどのような影響をおよぼすのか。

II 目的

Stern（1998）は、特別な配慮のいる子どもたちを授かるというトラウマを負った親は、子どもと自身の状況と経験を把握し、社会的サポートを受け、他者と関わることにより乗り越えて行くことにより「親になっていく」と述べている。また、岡本の成人女性のアイデンティティの危機と発達の研究では、中年期のアイデンティティの問い直しを迫るものに、子どもの障害などに代表される重大な他者の喪失体験を挙げ、障害児を持った女性が自力で子どもを育て上げるといった、危機から人生のトータルな見直しをすることにより危機を克服していく、自己のアイデンティティの再体制化のプロセスの研究結果を報告している（岡本、2002）。

これまでの障害児の親の研究は、先に述べた「障害受容」や「ペアレント・トレーニング」に関する物がほとんどであったが、近年においては、親自身の生涯発達に着目した研究も散見されるようになってきた（前盛、2009、など）。大久保の「発達障害児の母親になる過程」の研究では、その過程において母親たちは「孤立」しながら「障害児の母親」としてのアイデンティティを強化していくとされ、そこには障害に対するスティグマが影響しているとされている（大久保、2017）。また、小坂（2018）の発達障害児の親の「親

になっていくプロセス」における文化的背景の影響についての研究では、我が子と自己の受容にスティグマが大きな影響を及ぼしていることも明らかにされている。

スティグマとは、古代ギリシャにおいて奴隷や犯罪者・謀反人などの肉体に刻まれたり、焼き付けられた徴が語源であり、現代においてはアメリカの社会学者ゴフマンにより「人の信頼をひどく失わせるような属性」「ある個人を、全体や普通な個人からの汚名や軽蔑の対象に陥れるもの」と定義されている（Goffman, 1963）。その属性をもった個人は望ましくないものとして他者より軽視され、社会から十分に受け入れられなくなってしまう。属性の対象は、疾病・障害・職業・人種・宗教など多岐にわたり、近年、社会学や福祉学、経済学、心理学など幅広い分野でスティグマの研究が関心を集めている。

我が国においては、社会から付与される、または自身が感じるスティグマから、親は我が子の障害を受容しづらく、援助要請行動生起を抑制し、支援の早期介入がなされづらい傾向が高かった。しかし、他国（北米）の文化を経験するという環境の変化により、社会から付与されたネガティブなスティグマのパーспекティブは自身の中でポジティブなものに変容し、再び日本に帰国しても変容することなく内在化された状態が維持され、「被援助者から援助者へ」の道を歩む姿が認められたといった報告もなされており、スティグマのパーспекティブには、個人が生きる環境と文化の影響が大きく影響を与えることが明らかとなっている（小坂、2020）。

これまでスティグマの対象であった自身が、スティグマのある人達の援助者をめざすことにより、発達障害児の親の人生にどのような意味を与え、アイデンティティはどのように変化するのか。岡本の中期のアイデンティティ・ステイタス研究（岡本、1997）では、アイデンティティの再達成プロセスを、①これまでのアイデンティティの揺らぎ・崩壊 [アイデンティティの拡散] →②自分の生き方の見直し・将来の生き方の模索 [モラトリアム] →③軌道修正・軌道転換により再び主体的に関与できる生き方の獲得 [アイデンティ

ティの達成]としている。我が子が障害児であるという人生の危機に直面し、被援助者から援助者を目指すプロセスは、②の「モラトリアム」ステイタスであると考えられる。その後の③と段階すなわち被援助者から援助者になっていくプロセスは、岡本の研究のような結果を辿るとすれば、③アイデンティティの達成がなされると考えられることから、本研究では、発達障害児の親の被援助者から援助者へのプロセスにおいて中年期の危機を岡本の研究結果のように乗り越えていくのか、そのアイデンティティの再体制化のプロセスと結果を明らかにすることを目的とする。

Ⅲ 研究方法

(1) 研究協力者

筆者が勤務する2年制の指定保育士養成校に通う、社会人学生4名を調査対象とした。いずれの調査協力者も、子どもが発達障害の診断を受けている、または、発達の遅れの指摘を医療機関から受けている等、何らかの発達上の問題を抱えている者であった。調査協力者の属性は表1に示す。性別は男性(父親)が2名、女性(母親)が2名。年齢は50代が1名、40代が1名、30代後半が2名であった。調査対象者は、研究課題に基づきサンプリングした。調査開始に先立ち、研究の意図を口頭および文書で説明し、書面にて承諾を得た。

表1 調査協力者の属性

仮名	性別	年齢(歳)	子どもの年齢	子どもの性別	子供の診断名	前職
あきえ	女	55	22	男	ADHD	専門学校学生
まさたか	男	46	5	男	ASD知的障害	建設業
よしこ	女	39	12	男	広汎性発達障害	専業主婦
ひろき	男	35	3	男	未診断	製造卸売業

(2) 調査方法

調査は入学半年後と卒業3ヶ月前の2回に分けて行った。入学半年後に行った調査では、養成校の教室を借りて、調査協力者4名でフォーカス・グループインタビュー（以下、FGI）を行った。FGIを用いた理由は、日頃から共に学ぶ仲間として接しているメンバーと一緒にすることで語りが促進されると考えたからである。インタビュー中には適宜メモをとり、4名全員の承諾を得てICレコーダーに録音を行った。所要時間は80分程度であった。筆者が予め用意した質問事項に4名がそれぞれ答え、またさらに4名の中で自由に会話が展開される場面も見られた。

卒業3ヶ月前に行った調査は、新型コロナウイルス感染拡大の影響と1名が既に退学していたことから対面調査が行えず、オンラインでのFGIとなった。4名それぞれが仕事や家事で多忙なため時間調整が難しく、同時双方向ではなくテキストチャットスタイルを取った。これら2回のインタビューにおける質問事項は以下のとおりである。

- ①なぜ（転職までして）保育士をめざしたのか
- ②入学後のモチベーションの変化について
- ③養成校での学びが家庭や夫婦・親子関係に及ぼす影響
- ④養成校での学習内容や他の学生との関係について
- ⑤障害に対するスティグマについて
- ⑥人生における保育士になることの意味

(3) 分析方法

データ分析には、本研究の目的を踏まえ、相互作用により生じる変化のプロセスを現象として把握する研究方法である、ストラウス版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTA）（戈木クレイグヒル、2016）を使用した。

1回目のインタビューの録音を筆者が逐語録に書き起こしたものと、2回目のインタビューテキスト、インタビュイーから任意に提出されたこれまで

の育児経緯や感想をまとめた資料をデータとした。データ収集ごとに分析を進め、調査協力者に分析結果のフィードバックを行った。これらテキストを読み込んだ後、一文ごとに切片化し、切片ごとにプロパティとディメンションを抽出し、それらを基にラベル名をつけた。その後、類似するラベルを集めカテゴリー名をつけサブカテゴリーとし、さらに類似するサブカテゴリーを集め、そのサブカテゴリーの中から類似するものを集めカテゴリーとした。最終的に、より抽象度の高いカテゴリーグループ（以下 CG）とした。抽出したCGを基にパラダイムを作成し、CG同士の関連を検討しカテゴリー関連図を作成し、現象の中心となるCGを現象名とした。

以上の分析過程において、筆者とGTA分析の経験を有する研究者とデータ分析の妥当性を検討し、ラベル名の修正、カテゴリーの再編成、カテゴリー関連図及びストーリーラインの修正を行い、分析結果を確定させた。尚、本研究においては、新型コロナウイルス感染拡大という社会状況の影響から、限られた機会に収集されたデータだけを分析の対象にせざるを得ず、理論的サンプリングを行うことは出来なかった。

IV 倫理的配慮

FGIの実施にあたり、勤務先である指定保育士養成校学務課に研究計画および倫理面についての説明を行い、研究の実施についての承認を得てから研究を実施した。また、個人情報の保護や倫理面の観点から、調査協力者には研究の目的、プライバシーの保護、情報の取り扱い、インタビュー実施における調査協力者の権利について書面にて事前に説明し、同意を得られた場合には、同意書への署名をしてもらった。

V 結果

(1) 【人生の問い直し】という現象

本研究の結果、ラベル174、サブカテゴリー43、カテゴリー21、CG7が抽出され、中年期における【人生の問い直し】という現象が明らかになった。以下、【人生の問い直し】という現象のCG関連図（図1）、ストーリーライン、CG関連図の流れに沿ったデータを援用しながら各CGの説明について記す。尚、本研究では、中心となる現象を【 】, CGを《 》と表記した。

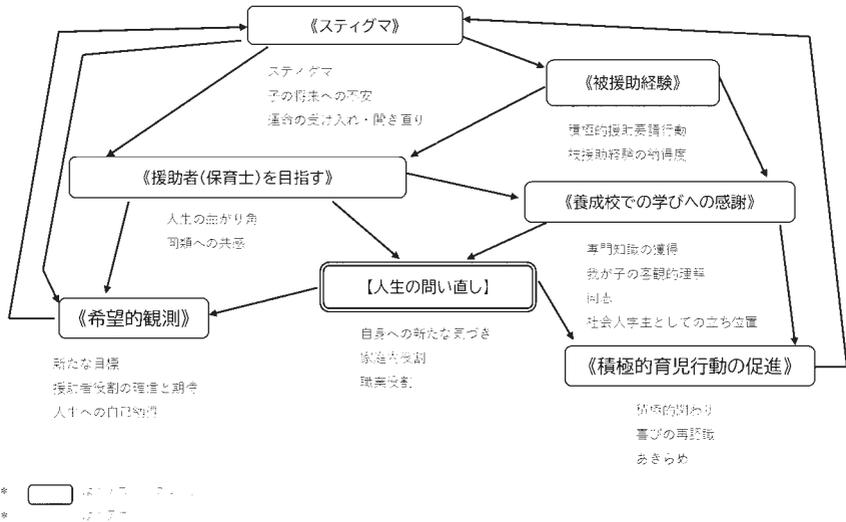


図1 【人生の問い直し】という現象に関するカテゴリー関連図

(2) ストーリーライン

発達障害児を授かり、社会から《スティグマ》を付与され、その先の見えない〈子の将来への不安〉を感じるも、それを克服し自身の〈運命を受け入れ〉、〈開き直り〉に至った。我が子を受容し〈積極的援助要請行動〉を起こしたが、受けた援助の質と形態は様々で、〈被援助経験の納得度〉は満足のものでは無かった。この《被援助経験》から、なかなか満足いく援助を

受けられていないであろう同じ境遇にある〈同類の人々へ共感〉し、また同時に〈人生の曲がり角〉の時期も相まって、自身で満足いく援助が出来る《援助者（保育士）を目指す》という〈人生をかけた挑戦〉を決意し、指定保育士養成校へ入学した。

養成校での保育の〈専門知識の獲得〉と、多様な人生背景を持つ〈同志の存在〉や自身の〈社会人学生としての立ち位置〉の模索は、あらゆる面での《学びへの感謝》へと繋がっていった。《援助者を目指す》ことと《養成校での学びへの感謝》は、自身の〈家庭内役割〉や〈夫婦関係〉、これから目指す〈援助者としての立場〉に対する再考をさせ、これまでの、そしてこれからの【人生の問い直し】をするという、中年期のアイデンティティ形成に大きな影響を与える現象をもたらした。

この【人生の問い直し】と《養成校での学びへの感謝》は、〈我が子の客観的理解〉や〈子育ての喜びの再認識〉、子育てへの〈積極的関わり〉という《積極的育児行動の促進》をもたらしたが、一方で、障害児の親であることから一生逃れられない事実への一種の〈あきらめ〉といった感情も垣間見られた。

また、この【人生の問い直し】は、保育士を目指した自己決定への自信を感じさせ、養成校卒業後の〈援助者役割の確信と期待〉と同時に、〈新たな目標〉を立てるといったポジティブな感情をもたらした。それと共に、援助者の立場になることに自身の人生の意味を見出すことで自己納得をするといった、半ば諦めにも似た感情も垣間見られ、この相反する感情に葛藤しながらの今後の人生への《希望的観測》が認められた。しかしながら、《積極的育児行動の促進》と《希望的観測》の後、再び自身の中にくすぶり続ける《スティグマ》に戻るといった径路も確認された結果となった。

(3)各カテゴリーの説明

1. スティグマ

認知面の発達の遅れや偏りは、身体障害のように目に見えるものではなく

識別が難しい。子どもの成長過程で日々不安を感じ、「きっとちょっと成長がゆっくりしているだけ」「いつか追いつく」など、保護者はわずかな望みに期待をかけて、なかなか現実を受け入れづらく、期待しつつも不安な気持ちに押しつぶされそうになりながら、日々を過ごしてきた様子がインタビューより伺われた。

調査協力者の子どもの年齢が低いほど、進学先や就労など、将来に対する漠然とした不安感が高い傾向にあった。子どもが成長するにつれ、不安感は軽減されてきていたが、その辛く苦しい育児過程において、調査協力者の全てが社会的に《スティグマ》を付与され、それに対する悔しい思いをしたり、反発を覚える経験をしていた。初めての子もで、且つ発達に遅れの認められた息子の不安な育児をしている中で、支援を求めて地域の幼稚園で行われていた子育て支援イベントを訪れた際の経験を、ひろきは以下のように語っている。

(子どもが) まあ走り回ったんで、ちょっと端の方でぶらぶらして遊んでたら、やんわりと「出ていけ」と。—中略— 僕は園を追い出されたって感じで出ていったんですけど、まあすごい悔しかった。悲しい思いして早々に切り上げて帰ってきた思い出があります。白い目で見られて。

[ひろき]

ただでさえストレスの多い子育てであるのに、社会からの理解も得づらく、フォーマル、インフォーマル共に子育てで支援を受ける権利を行使することもはばかれる状況が続くが、社会から付与されたスティグマは、やがて内在化されポジティブなものに変容していった。親自身のポジティブ思考傾向には個人差が認められたが、調査協力者の全てが、自身の人生における危機をポジティブに捉えようとしていた。

2. 被援助経験

全ての調査協力者が、自ら援助要請行動を起こし、育児過程において程度

の差はあるにせよ、何らかの形でフォーマル、インフォーマルな援助を受けていた。好意的に協力してくれる親族やママ友や、上述のように理解のない子育て支援事業、専門的療育など、受ける援助の質と内容に対する納得度は満足なものから不満足なものまで多様であった。納得度の如何に関わらず、《被援助経験》が基となり、今度は自身が援助する側に回って、自身の子どもや同じ境遇にある子どもや親の助けになりたいと考えるようになっていった。

療育とか色々あって、そこで初めて見学行ったんですよ。そこで、ものすごく先生が当たりのとこやったんですけど、そこが。通ってたんですけどね。ものすごく先生がよかったんで。自分の子どもも将来どうなるか分からないし。で、こういう仕事もあるんやなって思ったんです。—中略— 自分が、こういう子たちに寄り添って出来る仕事の方が、ま、ずっと仕事できるんのん違うかな？って。

[まさたか]

3. 援助者（保育者）を目指す

本研究の調査協力者の性別比は男女半々、年齢は30代～50代。子どもの年齢も3歳～成人と多様ゆえ、援助者（保育士）を目指す上での職業的背景も一人一人違っていた。特に、性差における背景の違いは顕著であった。養成校入学前の職業は、女性1人は専業主婦、もう1人は福祉系専門学校の社会人学生であったのに対し、男性2人とも全く異業種で且つ家計の収入を支える大黒柱的存在であった。これら全員に共通していたのは、それぞれが子育てが一段落、当初の目的が達成できた、仕事が上手くいかなくて悩んでいた、など中年期における〈人生の曲がり角〉という局面であったということである。

援助者を目指す理由は、男性は「同じ境遇にある人の役に立ちたい」、女性は「子どもと自身のキャリアのため」、という理由であった。背景や動機には個人差があるものの、発達障害児を持つ親として援助者（保育士）を目指し、自身の生活スタイルに合った指定保育士養成校に入学した。

(4) 保育士養成校での学び

実際に養成校に入学し、自身より一回り以上年下、果ては我が子よりも若い学生と共に〈専門知識の獲得〉することにより〈我が子の客観的理解〉を深めていった。この経験に対する想いをひろきは以下のように語った。

特に心理学なんかやっぱ一番役に立ってる。無駄に怒らなくて良くなったっていうか。やっぱ出来ないもんは出来ひんし。発達段階、過程っていうのがあるので。理解すれば、ま、次第に出来るもんもあれば、やっぱちょっと違うなっていうのもある。で、そういう理解が出来ました。

[ひろき]

養成校において保育士を目指す〈同志〉の属性は、不登校経験やひきこもり経験を持つ若者、何らかの社会人経験を経てきた者、定年退職した者など、人生の背景は様々であった。それら多様な背景を持つ学生との関わりの中で、子育てを経験し、社会的にも中堅的ポジションにある調査協力者たちは、自身の〈社会人学生としての立ち位置〉を模索しながら学生生活を送っていた。リーダーシップを取るか否か、若い学生たちとの資格取得に対する意識の違いに対する戸惑いを感じながらも自己調整を行い、共同体の中で同志と共に時間と経験を共有することに感謝する姿がみとめられた。

多くの若い人たちとの関わりの中で、助け合い、相談し合い、協力が出来るといった人間関係を築ける沢山の仲間と出会うことは、この先ないと思います。この齢で高校や大学とは違う一つの目標に向かって勉強するという仲間達と巡り会えたことは、大変嬉しく、これからも仕事をしていく中で、かけがえのない存在、思い出になると思います。 [まさたか]

(5) 人生の問い直し

【人生の問い直し】という現象を通し、各調査協力者の‘個としてのアイデンティティ’としての援助者役割と、‘関係性に基づくアイデンティティ’

としての家庭内役割が、どのように変容したか、インタビューテキストを引用したもの併せて表2にまとめたものを記す。

調査協力者のうち、あきえは入学後半年で体調を崩し入院したことをきっかけに保育士資格取得を断念し退学した。結婚以来、家族、特に息子を守り支えることを第一優先に考えてきたあきえは、保育士になることの意味を自らも問い直し、夫婦で話し合い、養成校を退学し再び息子専属の支援者に戻

表2 【人生の問い直し】という現象における役割変容

	あきえ	まさたか	よしこ	ひろき
援助者役割	放課後等デイ開業希望→母親	放課後等デイ開業希望→変化なし	特別支援学級介助員希望→小規模保育士	保育士希望→放課後等デイ&大学通信課程進学
具体的テキスト	途中でね、体がアウトになった時に、主人が「じゃあいいやん」と「お前の目的は仕事じゃない。息子のサポートやろ？」もう辞めろ」って言われて。それもあつた。だから絶対取ろうっていう気持ちで薄れてたのもあつた。一中略—それでこの学校は辞めました。	多くの(療育施設の)見学を繰り返しているうちに「自分でやった方が早いのではないか」と。そうすれば、自分で息子を見ることができると、息子と同じような子どもたち、自分と同じような境遇で療育探しをしている保護者たちの力になれるのではないだろうか」と思うようになりました。	いざ学校に通ってみると制作など通ってみたいのがとても好きなことに気づき、実習に行ってみて子どもが大好きな自分に気づきました。今は小規模保育園で介助員とは違う形で子どもたちの支援ができたかと思っています。私が出れることはなんなのか、日々思い悩むところです。	(人から)感謝されたいわけではないですが、自分の人生のために有意義に使っていきたいということです。一中略—自身は色んな人の話を聞き、人間関係が上手くまわるような存在になりたいです。
家庭内役割	主な家庭ケア役割→専業主婦	妻を支える補助的育児&経済的役割分担→主な経済的役割	専業主婦→主な家庭ケア役割	妻を支える補助的育児&経済的役割分担→変化なし
具体的テキスト	退学する時はとても悩みましたが、息子が私が入院した時に心理的に不安になり仕事も打ち込めない様子だったので、これでは本末転倒だと感じました。私が彼を支えるためには、健康でいなければ何もできないと気づいたのです。一中略—息子は社会で辛い思いをすることが多いので、心を支えることが大事なのです。	やはり子供の将来のことを考えると、私たち夫婦がいなくなつてから誰が面倒を見るのかと悲観することが多かったです。一中略—実習の中で保育と療育の違いを意識して考えるようになり、学んだことを自分の息子に押し、関わり方、声掛けや考え方を実践できることは大変心強いことだと感じています。私にとって一番の支援対象者はこれからもずっと息子です。	正直実家と母の支えがなかったら、とっくに離婚していたかと。私がしたくてしているのですが、息子のことは全て私がしてきました。一中略—でも基本的にはとっても優しく、私が何をしだすにしても文句も言わずに支えてくれるし、家族にとっても愛情深い人なので。母とのダブルの支えでなんとか明るく乗り切れてるのかなと思います。	子どもが産まれたときは早産の為、この子の人生はどんな風になるのかと心配でした。一中略—発音が気になるので、発達センターに提出するように妻が発達検査の結果を取り寄せたので、当時とは違い少しでも勉強した目で改めて見てみたいと思います。

ることを選択した。

入学前とは違う〈新しい自分に気付き〉、当初とは違う新しい援助者としての目標をたて、援助者の役割について問い直す者もいた。養成校に通い保育士を目指す過程を通じて、夫婦関係を見つめ直し、夫婦で支え合って子どもを育てていくこと、共にこれからの人生を歩んでいくことを再確認したことは全ての調査協力者にみられた。

(6) 積極的子育て行動の促進、(7) 希望的観測

この【人生の問い直し】と《養成校での学び》は、子育ての喜びの再確認をもたらすと同時に、日常の家庭での関わりや、学校などの教育機関や医療機関などへの相談や援助要請などに、これまで以上に積極的に関わっていくといった《積極的育児行動》へとつながっていった。また、卒業後の〈新たな目標〉や〈援助者役割の確信と期待〉にもつながり、援助者になることに自身の人生の意味を見出すことで、発達障害児を授かったという人生の危機は、自身の人生に意味があることであった、とポジティブに捉えようとしていた。

一方、ありのままの子どもを受け入れられるようになったようで、依然として子どもや自身の将来に対する不安はぬぐえず、且つ障害に対するネガティブなスティグマも心の奥底にくすぶっている、そんな相反する想いが複雑に入り混じる感情を、まさたかは以下のように語った。

(息子が通う療育で一緒のダウン症児と比較して) その、ダウン症の活躍してる子とかいてるじゃないですか。そういう子見てると、逆に羨ましいって思うのがすごくあって。 —中略— まだ発語ができてないので、大人になってからが一切見えないですね。どこまで親がサポートできるのか、一緒に生活できるのか。だから、最悪は悪いことも考えることもあるかもしれませんがねえ。

[まさたか]

【人生の問い直し】という現象は、《積極的育児行動の促進》といったポジ

ティブな行動選択につながった一方で、〈人生への自己納得〉をし、未来への《希望的観測》へつながるという結果にもなった。

VI 考察

人は、青年期に「自分は何者か」「自分はこういった人生を歩んでいきたいか」など、何らかの形でアイデンティティを確立する。それは他者との関わりの影響も受けて確立されるものではあるが、青年期においては‘個としてのアイデンティティ’（岡本、2002）の部分が占める割合が高い。自己を確立した後、エリクソンの漸成説による成人初期の発達課題‘親密性’を獲得（Erikson、1970）、即ち結婚し家庭を持つ者が多数を占める。やがて夫婦の間には子どもが誕生し、これまでの自分に‘親としてのアイデンティティ’が加わり、アイデンティティは‘個’から、配偶者や子どもなどの重要な他者との‘関係性’を重視したアイデンティティへとシフトしていく。

3歳児神話¹⁾の影響が色濃く残っていた昭和までは、「男は外で仕事、女は家庭で家事・育児」といった「性別役割分業の家族」は標準世帯モデルであったが、平成元年の1.57ショック²⁾を境に、日本は少子高齢化の一途をたどり、男女共同参画の推進など社会状況の変化に伴い、個人の生き方は多様化し男女性別役割分担も変化した。しかし、女性の社会進出が目覚ましいとされている現代においても、未だ家庭における家事・育児はほとんどが女性

1) 「3歳児神話」という言説は、小児科医のスピッツが提唱した「ホスピタリズム（施設病）」の概念と精神科医で発達心理学者のボウルビイの「愛着理論」から発した母子関係のあり方についての仮説である。母子関係においては、“連続性が一時的であっても中断すると安定した心理的絆はつukれない”という信念から、“3歳以下の子どもが毎日、昼間母親と分離されると心の発達に深刻な影響が出る”としている。我が国においては、1970年代高度経済成長期に話題にのぼるようになったが、1980年代後半には下火になった。（内田、2010）

2) 1.57ショックとは、1989（平成元）年の合計特殊出生率が1.57と、「ひのえうま」という特殊要因により過去最低であった1966（昭和41）年の合計特殊出生率1.58を下回ったことが判明した1990年の衝撃を指している。（内閣府、2007）

の役割であり（内閣府大臣官房広報室、2016。総務省統計局、2016.）、女性はそのアイデンティティ発達にも‘家族のケア役割’が大きく影響しているものと考えられる（岡本、2002）。

エリクソンの漸成説は、欧米の中流男性をベースに確立された理論であるといわれており、現代の日本の女性のライフサイクルはより複雑なものである。本研究の調査対象者の性別は男女半々であり、性別を無視し一緒にして考えるのは無理があるかもしれないが、中年期の入り口で起きた人生の危機「子どもが発達障害児であった」という共通の体験から、援助者を目指し、その課程においてみとめられた【人生の問い直し】という現象を基に、アイデンティティがどのように変容していくのか、被援助者から援助者への役割移行との関連を検討してみたい。

援助者への役割移行と中年期のアイデンティティの発達

夢と希望を託した我が子の誕生により、思い描いた理想の家族になるはずが、我が子の発達の遅れへの気づきにより、自らが描いた理想の家族は失われてしまう。障害の診断が下ると原因が分かってほっとする一方、先の見えない将来に対する不安を感じる。社会からも《スティグマ》を付与される立場となったことは、[膝を抱えてガタガタと震える：あきえ] くらいこの上なく辛く惨めなことであった。しかし、スティグマの意味は育児過程を通し自己の中でポジティブなものに変容し、積極的に子育て相談や医療機関などの社会資源を利用したり、自身の親や親戚、友達などにも積極的に援助要請を行っていった。その効果を良くも悪くも実感し、援助要請行動を起こした自己決定は正解であったと確信するに至り、この経験から、自身も同じ境遇にある親子の助けになりたい、と援助者（保育士）になることを目指した。これは、向社会的行動の一種である返報性援助行動であると考えられ（高木・妹尾、2006）、受けた援助の質の如何に関わらず、自ら援助要請行動を起こしたことに肯定的に評価したからこそ、援助者への役割シフトを決意したものと考えられる。

援助者（保育士）を目指したきっかけには、《被援助経験》および調査協力者それぞれが《人生の曲がり角》にあったことがあげられる。男性2人とも家計を支える一家の大黒柱であったが、それまでの仕事に不満を感じていたところに、子どもの発達障害（うち1人は疑い）が発覚し、子どものために保育士への転職を決意した。子どもは共に年少で、親はその障害受容の真ただ中であった。家庭内での育児は主に妻が担当していたが、積極的に育児に参加し、何より子どもの将来のことを不安に感じ、悲観していた。男女の性差の違いとして認められたことは、男性は自身と子どもの危機を、子どもの成人後以降の長いスパンで捉え案じていたのに対し、女性は「今、目の前の危機」を乗り越えることに集中して対応していたことである。これには、家庭内における経済的役割の違いが影響しているのではないかと考える。

女性は1人が専業主婦、もう1人が兼業主婦と、主に家庭内のケア役割を担っていた。それぞれの子どもの年齢は違うが、子育ての最も大変な時期でもある学童期を過ぎ、ケア役割も一段落し、ようやく自身のキャリアについて考える余裕が少し出てきたところであった。このように、男女で人生の危機の時間的捉え方、保育士を目指すキャリア的背景や家庭内の役割に違いがあったが、共にそれぞれの人生をかけた大きなチャレンジとして援助者を目指し養成校へと入学した。養成校で、保育の専門知識を獲得し、年齢や人生背景の違う同志と共に学ぶといった経験を肯定的に捉え感謝することは、自身の家庭内の役割や夫婦関係なども含め、これまでの【人生の問い直し】という現象がみとめられた。これは、岡本（1997）の「中年期のアイデンティティの揺らぎと再体制化」の研究によるところの、②自分の生き方の見直し・将来の生き方の模索〔モラトリアム〕と同じ課程であると考えられる。

この【人生の問い直し】という現象は、《積極的育児行動の促進》と今後の自身の未来への《希望的観測》へと続く径路が見いだされたが、これらカテゴリーは、決してポジティブなものではなく、「あきらめ」や「人生への自己納得」といったネガティブなカテゴリーも含み、且つ再び《スティグマ》へと返るカテゴリー関連結果から、岡本の研究結果（1997、2002）のように、

危機を克服し主体的に関与できる生き方の獲得〔アイデンティティの達成〕がなされたとは言えない結果となった。

スティグマと自我アイデンティティ

生涯、発達障害児の親であることに変わりはなく、これからもずっと、そして自分の死後までも向き合っていかなければならない問題である。自身と同じ立場にある人たちの役に立つために被援助者から援助者へと役割移行することは、【人生の問い直し】という現象をもたらし、障害児を授かるという中年期の危機を乗り越えるためには効果的であったと言えるであろう。しかし、「子どもの障害を受け入れ、子どものために、そして自身の人生を豊かにするためにこれだけ前向きに頑張っているんだから大丈夫」と自身に言い聞かせることで、「発達障害児の親」である自身の運命への不満や、子どもの将来に対する不安、未だ残る障害に対するネガティブなスティグマなど、本音の部分を打ち消しているかのようにも思える語りが、インタビューデータに散見された。

ゴフマンは、その著書「スティグマの社会学」の中でスティグマをアイデンティティの視座より、①社会的アイデンティティ②個人的アイデンティティ③自我アイデンティティのカテゴリーについて論じており、このうち③自我アイデンティティとは、個人が多様な社会経験を経た結果、獲得するに至った自己の状況、自己の持続性、性格などについて感じている主観的、リフレシブなものであると唱えている（Goffman, 1963）。

このゴフマンのスティグマとアイデンティティ理論を援用して本研究を考察するに、①発達障害児の親であるという社会的アイデンティティは、→②同じ境遇にある親子の役に立つべく援助者を目指す、自身の困難を乗り越えようと前向きに生きる個人的アイデンティティとなった、と考えられる。この個人的アイデンティティを実現した場である保育士養成校では、自身は「発達障害児の親＝スティグマをもつ人」であり、同時に「援助する側＝ノーマルな人々」という相反する立場にあるといえる。個人的アイデンティティは、

「自身は援助者（保育士）を目指すノーマルな人々と一緒であり、他の人と全く違ったところのない同じ人間である」という思いと、一方では「自分は養成校の他の皆とは違う別種の人間である」といった、ゴフマンの理論どおり“自己に対する疎ましさを物語る両価的な感情を抱き続けている（Goffman, 1963）”という自我アイデンティティにつながったのではないかと考えられる。

人のあり方の多様化が周知されてきている現代社会において、ゴフマンの理論が提唱された日本における高度経済成長期と同様の社会的価値観を、未だ抱えざるをえない立場にある「取り残された」ともいえる障害児の親であるマイノリティの存在は注目される点であろう。

これらをまとめると、被援助者から援助者への役割移行は、調査協力者それぞれが、主体的に我が人生の危機に対応している‘個としてのアイデンティティ’と社会や家族などとの‘関係性に基づくアイデンティティ’をバランスよく統合できるよう落としどころを見つけ、自身にとって最適な生き方の選択を自己決定するプロセスを歩むという、中年期の危機を克服しアイデンティティの再体制化にある一定の効果をもたらした。しかし、スティグマのある人からノーマルな人々と共に援助者を目指すプロセスは、根源的己矛盾をももたらした。しかしながら、発達障害児を育てるといった辛い経験をしてきた者が、ノーマルな世界である養成校という場に包括されているからこそ、当事者でしか気づかない細かな気づきを被援助者に対して行えるとも考えられる。以上のことから、被援助者から援助者への役割移行は、困難な発達障害児の育児をしている親の援助にも有用であると考えられる。

Ⅶ 本研究の課題と展望

本研究は、調査者が調査協力者の教員であるという立場で日頃から関わら合うといった関係性があったため、リラックスして積極的に研究に参加してもらえたと思われる反面、自分自身を調査者に対して良く見せようという意識が働いていたのではないかと考えられる。また、データ収集方法も当初

のFGIから、新型コロナウイルス感染拡大に伴いテキストスタイルに変更になり、調査協力者が自身の書いた文章を一度読んで訂正してから送付したりと、グループ内の他の協力者たちの目を意識してしまったといった声も聞かれた。これは対面でのFGIにおいても同じ傾向がみられたが、テキストスタイルの方が顕著であったため、文字にして残るデータは調査協力者が自身を装ってしまうのではないかという懸念がある。一方で、FGIではなかなか言えないことも、個人的にメールなどで文章化した方が思いを伝えやすいという協力者もあり、これらを踏まえ今後のデータ収集方法の課題としたい。

また、今回の分析によって、発達障害児を持つ親の中年期の危機におけるアイデンティティの発達について明らかになったものの、コロナ禍における限られたデータ収集であったため、理論が飽和になったとは言えない。理論的飽和に向けて、データ収集法を工夫しながら調査協力者数を増やし、分析を進めていきたいと考える。

本研究によって、被援助者から援助者への役割移行には、発達障害児の親が豊かな人生を歩むために一定の効果があることがみとめられたものの、スティグマのある人とノーマルな人々という相反する立場からくる根源的自己矛盾ももたらした。この自己矛盾は実際に援助者として働くようになってからも持続するのではないかと考えられる。今後は、実際に援助者としての立場が、発達障害児の親の人生にどのような影響を及ぼし、どのような意味があるのか、追跡調査等行っていきたいと考える。

VIII 参考文献

- Erikson, E. H. (1968). *Identity : Youth and crisis*. New York. W. W. Norton.
- Goffman, E. (1963). *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall, Inc. ゴフマン, E. (1970). スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ. (石黒毅 訳) せりか書房
- Grayson, M. (1951). Concept of "acceptance" in physical rehabilitation. *Journal of the American Medical Association*. 145 (12), 893-896.

- 萩原可那子・奥田訓子 (2019). 障害のある子どもをもつ母親の障害受容に関する研究. *Journal of Health Psychology Research*, 31, 253-258.
- 岩井阿礼 (2009). 中途障害者の「障害受容」をめぐる諸問題：当事者の視点から. 淑徳大学総合福祉学部研究紀要, 43, 97-110.
- 小坂智子 (2018). 障害と才能を認めて母親も人生を楽しむ (第7章 2E当事者と親の意識・支援[2]). 松村暢隆 (編), 2E教育の理解と実践：発達障害児の才能を活かす, 113-121. 金子書房
- 小坂智子 (2020). 文化移行が発達障害児の親のスティグマのパースペクティブ変容と意味生成に与える影響. 近畿大学九州短期大学通信教育部紀要, 2, 1-10.
- 前盛ひとみ (2009). 重症心身障害者の母親におけるアイデンティティ危機体験の様態の類型化および発達過程の分析. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 58, 215-224.
- 内閣府大臣官房広報室 (2016). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 内閣府 (2007). 平成19年版 少子化社会白書.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房.
- 大久保麻矢 (2017). 発達障害児の母親になる過程：「診断」による母親と周囲の人々の変化 お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢 19, 127-134.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2016). グラウンデッド・セオリー・アプローチ改訂版：理論を生み出すまで. 新曜社.
- Solnit, A., & Stark, M. (1961). Mourning and the birth of a defective child. *Psychoanalytic Study of the Child*, 16, 523-537.
- 総務省統計局 (2016). 平成28年社会生活基本調査.
- Stern, N. D., Stern, B. N. & Freeland A. (1998). *The birth of a Mother: How the Motherhood Experience Changes You Forever*. The Miller Agency, N.Y. 北村婦美(訳) (2012). 母親になるとのこと：新しい「私」の誕生. 創元社.
- 高木修・妹尾香織 (2006). 援助要請行動と援助要請・受容行動の間の関連性：行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究. 関西大学社会学部紀要, 34(1), 143-183.
- 内田伸子 (2010). 「3歳児神話」は『真話』か?：働く親の仕組みを見直し, 社会の育児機能を取り戻す. 学術の動向, 15(2), 76-86.
- 山根隆宏 (2013). 発達障害児・者をもつ親のストレスサー尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 83(6), 556-565.

謝辞

本研究において、調査にご協力いただいた学生のみなさまに心より感謝申し上げます。また、論文作成にあたりご指導いただきました関西大学の串崎真志先生に深く御礼申し上げます。